



沢遊びに興じる子どもたち。東京郊外の自然の中で、のびのびと過ごしていました。

パルシステム東京の震災復興支援基金、「パ
ミライカ
ル未来花基金」は、2014年の創設以来、延べ
57団体に約1,400万円を助成しています。
助成先の一つである「福島子ども支援・八王
子」が17年7月31日～8月3日、「2017なつやす
み ふくはち親子交流合宿」を開催しました。
福島の親子、16家族48人が参加した合宿の
模様を紹介します。

福島の親子が リフレッシュできる場を

「ザリガニがいた〜」「カニを4匹も
捕まえた!!」。子どもたちの歓声が
上がっていたのは、大地沢青少年セ
ンター（東京都町田市）の敷地内を
流れる境川。「福島子ども支援・八
王子」（通称・ふくはち）が開催した
「2017なつやすみ ふくはち親子交
流合宿」(ふくはち合宿)の一幕です。

ふくはちとは、福島の親子との交
流合宿に取り組むグループ。ふくはち
共同代表の近藤波美こんどうなみさんは語ります。

「原発事故後、八王子市（東京都）
では市民の放射能や原発への不安に
応える、『子どもたちの未来と自然エ
ネルギーを考える八王子市民講座』
が立ち上がりました。その中で、外
遊びが十分にできない子どもや、不安
を抱える保護者の実情を知り、その
ような福島の親子にリフレッシュでき
る場を提供するために、ふくはちを設
立。2012年から保養企画を始め、
春休みやゴールデンウィーク、夏休みに
ふくはち合宿を開催しています」

カンパとボランティアによる 手づくりのふくはち合宿

ふくはち合宿の特徴は、すべてカ
ンパとボランティアによる運営で、食

福島の親子を支える保養企画 「ふくはち親子交流合宿」

福島子ども支援・八王子、パルシステム東京



子どもたちが協力合って、新聞紙で大きなかぶとを作りました。



ふくはち合宿を運営された方々。後列左から奈良本洋二さん、
近藤波美さん、鳴海有理さん、花崎 晶さん、相原一晴さん、
前列左から田中真理さん、榎本知子さん、前田佳子さん。

写真：五味明憲



今回の合宿では、リピーターのお母さんによるワークショップも開催。写真左が「アクセサリーづくり」、写真下は「抹茶カフェ」。



写真左上：食事もすべてボランティアが作ります。料理ボランティアの多くは、普段は学校給食を作っている調理師さんたちです。写真左下：学生ボランティアの皆さん（合宿の参加者の子どもも飛び入り参加）。最後列右端が鈴木 蓮さん。



事も自炊の手づくり合宿であること。これに資金の助成をしているのが、パルシステム東京の「パル未来花基金」*です。同生協の組合員でもある近藤さんは「資金援助がないと、この企画は成り立ちません。本当に感謝しています」と言います。当日によって異なりますが、ふくはち合宿には1日に30人程度のボランティアが参加します。子どもと一緒に遊ぶほか、参加者全員の食事が作りや、乳幼児の保育など役割はさまざま。また、地元の農家の方が食材を提供してくれたり、多くの人が合宿運営を支えています。

「子どもを見守る人も多くいらして、子どもたちが生き生きと自然の中で遊んでいます」とコメントをくれたのは、今回が2回目の参加という佐藤良恵さん。中でも参加した親子から絶大な信頼を得ていたのが、大学生のボランティア。彼らの周囲には、常に子どもたちの笑顔がありました。学生ボランティアのリーダー、鈴木蓮さんに話を聞きました。ご自身も福島市出身で、参加者に親近感を覚えるそうです。

「子どもは大人を映す鏡のようですね。こちらが笑顔で接すれば、笑顔が返してくれますし、ありがたうと伝えれば、ありがたうと言ってくれます。そこがうれしくて今年も参加（3年連続）しました」そんな学生ボランティアの活躍ぶりに感動していた一人が、3人の子どもと参加していた金田理恵子さん。「私の子どもも将来、このようなボランティアをできるようにしてほしい」と話してくれました。

ふくはち合宿をきっかけに交流を続けてほしい

ふくはち合宿の狙いの一つに、同じ思いを持つ保護者同士の交流があります。今回初参加の官野和香さんは、「大学生などが子どもの面倒をみてくれるので、母親同士でリフレッシュできたことが大きい」と話します。



お話を伺った官野和香さん（後列左）、金田理恵子さん（後列中央）親子。

過去に参加した方々が、合宿終了後もお付き合いを続けているケースもあるそうです。

また、今回の合宿では、リピーターの参加者によるワークショップも開催されていました。今回のメニューは、伊藤美紀さんの「抹茶カフェ」（抹茶たて）と阿部こずえさんの「アクセサリーづくり」。お二人とも自らの意思で、開催を決めたそうです。これに関して、近藤さんは「これからは、主催者側がすべてお膳立てをするのではなく、参加者のお母さんたちと一緒につくっていく合宿にしていきたい」と語ります。

ふくはちのスタッフである前田佳子さんに、活動の今後について伺いました。「同じ子を持つ母親として、原発事故に対する不安や心配は、とてもよく分かります。これからもふくはち合宿を続け、福島の親子とつながりを持っていきたいです」



ふくはち合宿終了後、参加者とボランティアスタッフ、全員集合！（写真提供：ふくはち）

* パルシステム東京の組合員が商品やサービスを利用することで生まれた剰余金を元に、組合員の東日本大震災復興支援活動を資金面で支援する仕組み。詳細は「パルシステム東京 パル未来花基金」で検索を。